

2026 年第 40 週の報告です。大型の連休が終わり、報告も通常に戻ってきました。
今週の**インフルエンザ**は、先週の中丹東に続き南丹でも流行発生基準値を超える報告がありました。**咽頭結膜熱**は山城北で今週も警報レベルです。
全数把握対象疾患は、**結核**が 9 件、**腸管出血性大腸菌感染症**が 4 件、**エムボックス・デング熱・劇症型溶結性レンサ球菌感染症・侵襲性インフルエンザ菌感染症**と**侵襲性肺炎球菌感染症**がそれぞれ 1 件、**梅毒**が 3 件報告されました。

エムボックス（旧名：サル痘）は京都府内で 3 例目となる報告です。2024 年の 1 例が最初で、2025 年にも 1 例が報告されていました。

エムボックスはこれまで主にアフリカの一部で発生がみられていた感染症ですが、2022 年に世界的な流行がみられました。いったん落ち着いたものの、2024 年にはコンゴ民主共和国を中心に再び流行が拡大しました。現在は国際的な緊急事態（PHEIC）は解除されていますが、流行そのものが終わったわけではなく、特にアフリカ地域で監視と対策が続けられています。

日本では 2022 年 7 月に初めて患者が確認されました。その後、2023 年には年間 224 例と報告数が増加しましたがその後は減少傾向となっていました。しかし、2026 年は再び増加傾向となり、第 39 週時点で累計 132 例が報告されていたところです。

エムボックスは天然痘ウイルスと同じオルソボックスウイルス属に属するエムボックスウイルスによる感染症です。感染者の皮膚病変との接触や飛沫への長時間の曝露、使用した寝具や衣類などを介して感染することがあります。また、流行地域では野生動物との接触や加熱不十分な肉の摂取による感染も報告されています。空気感染を起こした事例は確認されていません。

潜伏期間は通常 6 ～13 日（最大 5～21 日）で、発熱、皮疹、リンパ節腫脹などの症状がみられます。多くは 2～4 週間で自然に回復しますが、免疫機能が低下している方や小児などでは重症化することもあります。国内では抗ウイルス薬のテコビリマットが薬事承認され、特定臨床研究が実施されています。また、天然痘ワクチンにはエムボックスの発症を予防する効果があるとされています。

エムボックスへの感染を疑って医療機関を受診する場合は、受診前に医療機関に電話で相談したうえで受診してください。

▶ [エムボックス（旧名：サル痘）／京都府感染症情報センター](#)

▶ [エムボックス | 厚生労働省](#)